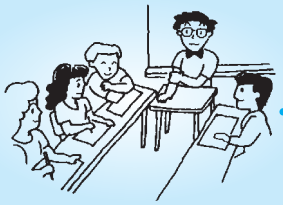

編集ボランティアのページ

●担当編集ボランティア／森　勝己、築城基裕、岩下茂子、石井恵子

新たな高齢者問題…買物が困難な人達を支えよう

最近、高齢者福祉の分野で「買物に行けない人達を支えよう」という話がよく出ます。以前は自分の町内や隣の町内には、八百屋さん、薬屋さん、よろず屋さんがあって、高齢者でも日常品を歩いて買うことができました。その後、経済の変動と車社会は、郊外の大型店舗ラッシュを生み、近くて便利なお店が少なくなりました。更に、未曾有の少子高齢化が家族構成の激変を招き、高齢者の二人住まいや独居家庭が増え、買物さえ難儀な方達が増えました。

このような方達のために、行政や社会福祉機関およびＮＰＯ団体の施策も多くあり、買物・通院などを援助しています。しかし、その対象者は、主に身体障がい者の方（介護保険の認定者）に限られることが多く、単なる歩行困難者には、あまり目を向けられていないのが現状です。歩けるけれども「一人で安全に歩けない」方達が増えているのです。

2005年の愛・地球博（愛知万博）の会場で、お客さんを乗せた幌付きの自転車が登場し、会場内のパビリオンをドアツウドア（玄関から玄関へ）で走っていました。「ベロタクシー」と言います。国内では約21の都市で登録があり、主に観光客ガイドに使われているようです。運営資金はガイド料金に加え、幌や車体に描かれた広告スポンサーからの広告料で支えられています。いわば動く広告です。法的なことなど詳細は分りませんが、こんな乗り物が高齢者の足となり、外出や買い物などを援助するＮＰＯ活動団体が、わたくし達のまちにあってもいいなと思いました。

「あなたが認知症になったから あなたが認知症にならなかったら」

越智須美子・越智俊二著

今回ご紹介する本は、若年性認知症になった夫を支えた妻と家族のお話です。マスコミで紹介され、映画「明日の記憶」のモデルになっています。47歳という若さで認知症になってしまった本人や家族の苦しみ、思い、優しさや哀しみが赤裸々につづられています。会社に行く道順がわからなくなり、やがて仕事の手順もわからなくなって職を失い、日常生活さえもままならない不安でいっぱいの俊二さんを元気にしたのは、通っていたディサービスの施設長さんでした。病気になった気持ちやこれからのこと、家族への思いなど、俊二さんの思いをたくさんの時間をかけて、何度も何度も聴いてくれたのです。自分に関心をもって話を聴いてくれる人がいることで、自分の存在価値を再確認できるようになったのだと思うと妻の須美子さんは言っています。患者と毎日一緒に過ごす家族は、気持ちに余裕を持つのは難しいと思います。私は傾聴の大切さを再認識しました。

俊二さんは徐々に病状が進行するなかでも、通っていたディサービスで陶芸やはがき絵、書道に楽しみを見つけます。その作品は360点にのぼり、展示会も開かれました。須美子さんは展示会をやってよかったと言っています。それは、認知症になっても多くの大きな力を有していること、認知症になっても豊かな感情は決して失われないということを多くの人たちに伝えることができたからです。

47歳から62歳までの16年間、若年性認知症の俊二さんを支えてきた須美子さんは最後にこう結んでいます。

『夫が認知症になって、失ったものがありました。夫が認知症になって、得られたものもありました。夫が認知症にならなかったら、今より幸せだったかもしれません。夫が認知症にならなかったら、幸せというものに気づかなかったかもしれません。』

俊二さんが2004年第20回国際アルツハイマー病協会の国際会議で若年性認知症の当事者として講演されたことは、同じ病に苦しむ人や介護する家族にとって大きな励ましになりました。高齢者の認知症だけでなく若年性の認知症に対しても、もっと社会の理解と受入れが必要になってきています。

～要約筆記初級講座から～

要約筆記とは、耳が不自由な方達が必要とする情報を書いて伝える手段です。
まだまだ社会的には、あまり知られていませんが、これから高齢化社会が進む中、求められていく技術だと私は、思っています。
今回、初級講座を10回コースで開催させていただきました。参加者皆様の受講理由は様々で、終わった時の感想もそれぞれでした。
やはり手話の経験をなされた方の参加も多く、要約筆記の技術だけでなく、どんな組織で活動しているのか、現実の障害者の生活の問題点に興味を持っていただいた方がいたり、積極的な手話の活動をしながら、さらに視野を広げる為に参加する方、さらに加え、話をまとめるのが苦手なのでそれを克服する為にも参加したいという方もおりました。

話し言葉を、要約して情報を提供していく大切さが少しでも分かっていただければと…
自分のまわりに聞こえにくくなった人がみえたら、大きな声で話しかけるのでなく、書いて伝えると喜ばれる事も、知っておくとよいかもしれません。
興味を持たれた方はどなたでも私達のサークルへきてみて下さい。

要約筆記サークルびさい
定例会：毎月　第1・第3火曜日
時間　午後1時30分～3時30分
場所　社会福祉協議会尾西支部

「介護と暮らし」　実録体験レポート2

～要介護認定が下りたものの…～

前回は、私の父（73歳）の要介護申請手続きの様子をレポートさせていただきました。
今回は、引き続きその後の様子をレポート致します。
申請手続きをしてから待つこと数週間、父の結果は「要介護２」と認定されました。結果が出るまでかなり時間がかかると聞いていましたが、思ったより早く、私の予想より重い認定が下りました。申請問診時は転倒時まもない時期で、鎖骨骨折の影響で自力でトイレに行くことが精一杯のレベルだったことや、やはり認知（痴呆）の度合いにも依ったのでしょう。その後、幸い！？入院生活は約３週間で終わり、父がとうとう我が家にやってきました。我が家は建築後６年程しか経っておらず、バリヤフリー仕様にはなっているものの介護老人を迎え入れるための専用部屋も想定しておらず、１Fの和室（兼寝室）を間に合わせで片付け、そこに介護用ベッドをリースし準備しました。恥ずかしい話ですが、実は私の父は普通ではなく、他に見たことがない、我がままと自分勝手な性格で、全く人の言うことをきかない人間です。実はこの点が一番の心配でした…。結局我が家の同居生活は４日を待たずに終了しました。予想通りの性格にまして、認知症状もあり、全く新しいことが覚えられずに、朝から晩まで「トイレはどこ？」「水道はどこ？」「テレビはどうやってつけるの？消すの？」の質問に答えているだけの状況に私が耐えられませんでした。（昼間家にいる妻はもっと大変だったと思いますが…）。デイサービスも体験で無理やりなだめて何とか１日行かせたのですが、その後は予想通り「二度と行かない」で終了。そんなこんなで、父と私の度々の喧嘩ごしの問答の際、思い切って帰してしまいました。（帰ってもらいました）私や妻がノイローゼになってしまったら、まだ幼い子供を３人も抱え、元も子もない状況になってしまいます。反面、幸い父の体調は少しづつ回復していたため何とかなるだろうとの思いと、痴呆の方も長年住み慣れた実家の方がいいとも思ったからでした。
その後、妻が毎日父の住む実家に食事を持っていき（１Km程の所）、大の風呂嫌い（これがまた臭くて困る）を何とか週に１回なだめすかして、我が家に入浴に呼んでいます。その後、約３ヶ月が経ち、今のところ何とかかんとかギリギリの状況ではありますが父は１人で暮らしています。

予想通り、トイレや水道やテレビも自分で使いこなしています。ただ基本的に言うことは聞かず、好きなビールは止まる所を知らず、ほとんどビールのみの日もある位です。（またいつ倒れることやら…トホホ…）さてさていつまでこの状況がつづくのか。
次回のレポートにつづきます。